

著／秋山真琴

written by AKIYAMA Makoto

絵／綾風花南

Illustration by AYAKAZE Kanan



突然、強い風が吹き込んできて、机の上にあった紙はすべて床に落ちてしまっ
た。

「この天気だ、傘も差さずに歩かせるの
は酷だろう。うちにつれてきて、シャワー
を浴びさせたのはいいが、何を着せたら
いいか分からん。助けてくれ」

すっかり体も温まって、気持ちよく
なったところで浴室を出たら、値札がつ
いたままのバスタオルの上に、下着と肌
着とジャージがそれぞれユニクロの袋に
入ったままの状態置いてあった。この
値札はどうしたらいいのだろうと思いつ
つ、着替えを脇に避けてバスタオルを持

ち上げたら、その下にハサミがあった。

はて、あの男はこんなことをするよう
なマメな人種には見えなかつたけれど。

人は見かけにはよらないものだなあと
思ったら、案の定、タオルと着替えを手
配してくれたのは彼の友人だったらしい。
それにしても。

座布団の上で足を崩し、お茶を飲みま
がら、私は思う。

左には寝癖が最高に格好いい和装の男、
右にはノーネクタイでスーツの眼鏡男。
二人とも、いい人だなあ。

この発端は、百色眼鏡が暴れたこと
だ。

察しのいい読者は、そろそろ気づいて
いるだろうと思うけれど。

この物語の主人公であるところの私、
草薙琳瑚はこの世界の神である。

断片化する
fragmentated
calligraphy
断片化する
断片化する

「(S)の自明でない零点sは、全
て実部が二分の一の直線上に存在す
る」

金曜日の六時間目、数学の授業。E棟
の三〇六教室。

次の日が祝日で休みだから、この授業
さえ乗り切れば、月曜の朝までは解放さ
れるというのに、百色眼鏡がいきなりへ力
ある言葉を呟いたせいで、みんなが脳
裏に思い描いていた放課後の予定は台無
しになった。

まず黒板が淡い黄金色に包まれて、爆
ぜた。

去年の暮れにうちにやってきた、去年
まではまだ大学生だったという葉子先生
は、爆風をまともに受けて、窓ガラスを
突きやぶり校庭に吹き飛んでいった。言
い忘れていたけれど、E棟は目の前に校
庭があって、正門も見えているというの

に、昇降口が反対側にしかなくて、普段生徒は校庭に出るのに少なからず苦労している。とは言え、葉子先生のように窓から出たいとは思わない。三階だし。話を戻そう。

爆風は教室の真ん中ぐらいで授業をおとなしく受けていたももんがさんが、逆風の太刀だか何だかで無効化してくれたけれど、彼女のおかげで爆風の影響を受けなかったのは、彼女よりも後ろに座っていた生徒だけで、それ以外の大半は葉子先生と同じように外に吹き飛ばされたか、廊下に吹き飛ばされたか、教室の後ろの壁に叩きつけられるかした。

心底くだらないことに、百色眼鏡本人も爆風を受けたひとり、今はロッカーの前で伸びている。左耳のピアスが耳たぶごと何処かに飛んでいってしまったている。

ああ、帰りの掃除が面倒だし、放課

後、百色眼鏡にこの世界の神として神罰を下さないといけないと思うとさらに面倒……と思っているのは、現在進行形で教室の掃除をしている私で、百色眼鏡が〈力ある言葉〉で教室をめちやくちやにしていたとき、私は、ももんがさんの後ろの席でぐーすかやっていた。

さて、放課後である。

神の権限で全生徒と教員を帰した後、私はE棟とB棟と体育館に囲まれたデッドスペースで百色眼鏡を待っている。今の状況は、放課後・於体育館の裏、と言えないこともないが実際は設計に失敗してしまっただけ出来た袋小路のような場所だ。百色眼鏡に私が神罰を下すのは三回目だ。一回目は肅々と叱られていたが、二回目は体育館の屋根の上から飛び降りてきて、私の脳天に一撃を与えようとしたかった。

もしかしたら、今回の騒動も、数学嫌いの百色眼鏡が葉子先生の退屈な授業に耐えきれず暴れただけじゃなく、私へのリターンマッチのつもりなのかもしれない。だとしたら、それこそ、くだらないではないか。

百色眼鏡は〈力ある言葉〉を使いこなさず、暴帝という不名誉な称号を欲しいがままにしており、確かにその名に相応しく凶暴だが、所詮、その力は人間の範疇に収まってしまっただけで、神である私の足元には及ばない。

それにしても遅い。宮本武蔵か、あいつは。

腕時計を見下ろす。

刹那。

背後に気配を感じた。そしてほぼ同時に、ぎゅいぎゅいぎゅいという耳障りな音。

私は素早く飛び退った。が、どこか油

断っていたのか右足を持っていかれてしまった。

百色眼鏡——！

やはりこやつ、私との再戦を果たすつもりだったか!!

左足だけで着地し、私は校舎にもたれかかるようにして体重を分散させる。

分断された右足が宙をぐるぐると踊る。

百色眼鏡は地中に潜んでいた。チェーソソを手にして。

まったく、用意周到じゃないか。

ドクドクドクドク……

私のかわいい右足が地面に置きざりにされている。泥まみれになっている。

あー……

周囲は百色眼鏡が手にしているチェーソソの破壊音に満たされている。私の耳はその音を捉えるが、私の脳はそれを重視していない。もっと大きな音が聞こえるからだ。

鐘の音だ。教会の鐘の音だ。

酒に酔って女を抱いた神父が私の頭の中で鐘を打ち鳴らしている。頭痛い。

私の足が私から切り離されてしまったのは誰のせい？ ねえ、誰のせい？

すっかりとした大人に出会えなかった私が不運だったから。

それとも、あんな政治家を選んでしまった私たち全員の責任？

あー……西の果てで蝶々が舞う。東の果てで風が疾る。

「お」

土中から這い出そうとしていた百色眼鏡が、その右足を根元から失って、最初に口にした言葉がそれだった。とは言え、その直後に「おおおおおおおおおとおお」と雄たけびをあげてしまったから、最初の「お」の特殊性は薄れて消えてなくなってしまった。

「うふ、これでおあいこ」

見たか、これが神の力だ。神の力で増幅された、バタフライエフェクトだ。

「琳瑚！ 手前!!」

「琳瑚様、だ。人間」

日本人には素敵な美德がある。

例えば恥じらい、謙遜、敬語、菊と刀。

「ねっ、百色眼鏡くん」

神II私の見えざる左手が、百色眼鏡の

口を無理やりに操作する……

「り、ん……ご。さま」

「うふふ」

おっとくだらないことに〈力〉を使ってしまった。

そろそろ止血をしなければ。

神の血は無限。右足を失った私の右脚は、無制限に本来、供給するはずだった血液を送り出しつづけている。このままでは、こちらへん一帯が文字通りの血の海になって聖地化してしまう。

股のあたりに意識を集中させて止血を

行う。

そこに一抹の隙を見つけたのか、百色眼鏡は口を開けた。

「油断したな——【楕円曲線E上の有理点と無限遠点0のなす有限生成アーベル群の階数(ランク)が、EのL関数L(E・s)のs=1における零点の位数と一致する】」

もたれかかっていたE棟の外壁が、昼間の黒板と同じように、黄金色に輝く。

「あらー……?」

直後、凄まじい衝撃。

E棟が衝撃によって解体されるのを感じながら、私は空を舞う。

「やるねえ、百色眼鏡くん。でもねえこの程度じゃ」

吹き飛ばされ、倒立の姿勢で私は百色眼鏡を睨みつける。

けれども百色眼鏡は動じるどころか、口元を歪め、嫌らしい笑みを浮かべや

言え神を踏んだ人間にも死を。私はくだらない幽体離脱なんて止めるため急降下する。

自分の体に戻りながら、そつと百色眼鏡の阿呆に教えてやる。

「可哀相な百色眼鏡。今まで数学が嫌いだったから、数学に巣食う難問の数々を、その謎を解き明かそうと群がる学者たちの力を、自分の好きな色と形に変換できたんだよね。でも、残念だったね、今の君はもう数学が嫌いな子じゃなくて、むしろ好きな子だよ。私がそうしてあげたから。もう安心だね。数学が得意なだけじゃなくて、好きになったのだから、お父さんと同じ職業に就けるね、お母さんの期待に応えられるね。やったね」

そうして自分の体に戻った私は、右手を持ち上げて百色眼鏡を吹き飛ばす。起き上がり、落ちていたチェーンソーを拾う。シンプルな構造だ、このスイッ

がった。

「効かないってか? じゃあ、これはどうだい——【計算量理論におけるクラスPとクラスNPは等しくない】【複素数体上の非特異射影代数多様体について、任意のホッジ類は、代数的サイクルの類の有理数係数の線形結合である】【n次元ホモトピー球面はn次元球面に同相である】」

おうおう、頑張るなあ。

三連続で放たれた「力ある言葉」が、私と一緒に空中に投げ飛ばされた様々な塵芥を黄金色に包んでゆく。

しかしこれはさすがにまずいかもかもしれない。

三百六十度、死角が見当たらない。いくら神とは言え。これは、さすがに。あ。

気がついたとき、私は地面に横たわっ

ちを押すと刃が回転する。私は「えいっ」と力を込めてスイッチを押す。五倍のスピードで回転が始まった。チェーンソーが限界を越えた加速に熱くなる。

「神罰だよ?」

百色眼鏡の上に馬乗りになり、私は百色眼鏡のからだを、既に切り分けた足を含めて七つに分断した。

血の海に浮かぶ七つの身体は赤色にか染まらない。

「あ、夢か」

ももんがさんに起こされた私はよだれを拭って、教室の掃除をするべき立ち上がった。

百色眼鏡に置き傘を取られてしまったので、私はこの雨の中、ずぶぬれになりながら帰ることになった。こういうときは本当に、E棟の昇降口から正門までの

ていた。

意識は戻っていない。

幽体離脱した人が、医者によって治療されている自分自身を客観的に見る事ができるように、私は死んだように倒れている私を見ている。いや、死んだようにはなく、死んだのか。でも、神が死ぬわけないし。

あれ、神でも死ぬんだっけ?

私がそんなことを考えていると、百色眼鏡はぴよんぴよんと近づいてきて、私の頭の上に一本足で乗りやがった。あーあ。

「とどめだ——」

百色眼鏡は「力ある言葉」を口に出れなかった。

何故って、百色眼鏡は神を足蹴にしてしまったのだから。

神を踏んづけて生きられる人はいない。踏み絵を拒否した人間には死を、絵とは

無駄な遠回りが頭に来る。

何が頭に来るって、鞆が現在進行形で濡れており、浸食は鞆の中に及びつつあるからだ。

辞書も教科書もロッカーに置いてきたが、書き途中の小説を学校に残しておくわけにはいかなかった。

学校のロッカーなんて一種の無法地帯みたいなものだ。

一見、そこには各々の領土があって、それらは領主によってきちんと治められているように見えるけれど、実際には領主を束ねる諸侯の存在があって、さらに領主の指示に従わない無法者の存在があるのだ。

運動靴が知らない間に使われていたり、教科書に覚えのない書き込みがあるのは、日常の謎でもなんでもない。必然だ。

ああ、ちくしょう。また書き直さないといけないと思うと

億劫だ。明日は風邪を引いたことにして休もう。

家に入り鍵を閉めて少し経ったが、私は玄関から上がれない。少しだけ泣く。

ここから先は浸水が酷く、入り込むことが出来ない。

「あなたが夢野さん」

右側の男を見ながら訊く。

「ああ」

彼は神経質そうに眼鏡のブリッジを指先で押さえながら頷いた。

「そして、あなたが宗田さん」

左側の男を見ながら訊く。

「そうだ。ははは！ 宗田だけに、そうだ。そりやそうだ。はっはっはっ」

「くだらんぞ」

「そうだ、くだらない。ははは、宗田の姓は、何もかもを全肯定するぞ。夢野、

貴様の偏屈さも俺は肯定してやろう。草薙、貴様の貧乳も俺は肯定しよう」

「さ、最低だなお前！ 初対面の女の子に向かつてそんな」

「ほう。ならば夢野、貴様は初対面でなければ貧乳微乳無乳と言っても失礼ではないと言うのか！ 茶碗だな！ 間違えた、茶番だな！」

「違う、それを言うなら詭弁だ」

あ、あは。

なんなんだろうこのくだらなくも、面白おかしい人たちは。

「あのお二人は、どういった関係なんですか」

「夫婦だ」

「ば、馬鹿！ 草薙ちゃんが信じたらどうするんだ！」

「馬鹿は貴様だ。俺は今、俺と貴様がおしどり夫婦のように仲がいいという意味で『夫婦だ』と答えたのだ。それを貴様、

つまらん言いばかりなどつけおって。貴様のような空気を見えないやつは、こうしてやる。こうしてやる」

両の拳を固め、宗田さんが夢野さんの頭を挟もうとする。

夢野さんは「ちよっと、やめ、やめろよ！」と言いつながら逃げている。

なんて——微笑ましい光景だろう。

私は三分ほど二人のラブラブっぷりを觀賞してから、少し前から気になってくる点を、宗田さんに聞いた。だしてみた。

「あの、宗田さん」

「なんだね」

「宗田さんの乳首ってどうして黒いんですか」

最前から宗田さんが身にまとっていた和服が、ずいぶんと乱れていたのだ。そのせいで胸元は覗けるどころか、かたんに直視できるようになっており、彼の随分と色黒い乳首に私の視線は釘付け

だった。

「ふふん、教えてほしいかね」

「ええ。是非とも」

「ならば……」

そこで宗田さんは、ついと視線を私から夢野さんにずらした。

宗田さんは二秒ほど夢野さんを見つめていたが、やがて犬を追いやるようにしつしと手を振った。

「なんだよ突然？ 何か言いたいことがあるのなら口で……。お、お前、まさか」

かあああと音が聞こえそうなくらい、色白だった夢野さんの顔が紅潮する。

「そそそそんな不埒な。そんな行為は許しません！」

「なんでだ？ と言うか、行為って何のことだ？」

「行為だなんて！ ああ、草薙ちゃん！」

「は、はは」

「こいつの乳首が黒いのは、こいつが武道家だからですよ！」

「武道家だと乳首が黒くなるんですか？」

「そんなこと知りません！ とにかくだめです！ 草薙ちゃんはまだ高校生なんだから」

なにか誤解されているような気がする。気がする、けれどもその誤解は別に解

かなくてもいいように思った。私はこの後もいくつか宗田さんに質問

したが、宗田さんがボケて、夢野さんが墓穴を掘る、その繰り返しだった。やが

てお腹が空いたので出前を取って、夢野さんが帰り、宗田さんと二回えつちして、

私は宗田さんに小説を見せることにした。

紫煙が天井に昇ってゆく。けれど、扇風機の角度が絶妙なのか、彼らは絶対に天井に辿りつけない。その前に攪拌され、

希薄が限界まで進み、消失もしくは融合してしまふ。

布団の上に横になった宗田さんが、私の小説を読みながら煙草を吸っている。

しかし、眠いのか先ほどから吸い殻を捨てる間隔が伸び、目蓋も今にも落ちてしまふそうだ。火事は目前だ。

私は乾いた制服に着替え、椅子に座って宗田さんを見ている。

少し、咽喉が渴いたので、勝手に冷蔵庫から取り出したアップルジュースをすすする。

「いいね」

「え、うそ」

私は少なからず驚いた。

だって宗田さんの寝室は三面本棚で、東西の文学全集が整列しているのだ。

親戚の金で食わせてもらっているという宗田さんは、すでにそれらを読破したと言っていた。万巻の書を積んだ宗田さ

んに誉められるとは、思わなかった。けれど、私の胸に湧き上がった感動は、一瞬にして沈下した。

何故って次の瞬間、宗田さんの手が両方ともガクリと垂れたのだから。

寢言、だったようだ。

私は小説を回収すると、アップルジュースを飲み終えて、宗田さんの家を辞す。

家路を辿りながら、東の方角から差ししてきた明かりが、私の影を踊らす。

もう夜明けか。

ここから先は焼け落ちている。進むことはできない。

宗田さんの家から歩いて五分。その住宅街は、山の斜面にへばりつくように建てられていた。一体、どれだけの土を崩して運んだのだろうか。そんなことを考

えながら、夢野さんの家にお邪魔したら、ももんがさんがいて驚いた。

なんと彼女は夢野さんの妹だと言う。

「どうした右足を怪我してるじゃないか。どれ手当てしてやろう」

「あ、うん。ありがとう」

ももんがさんは救急箱を持ってくると「どっこいしょ」と言いながら、ソファに座っていた私の隣に腰かけた。

「兄貴」

「そうだな。仕事も残ってるし、少し片付けてくる」

ボタンと戸が閉まるのを確認してから、ももんがさんが私の右足を持ち上げて膝の上に置く。私はスカートを穿いていた。

「ひどいな。油断したのか、それともわざと斬らせてやったのか」

「うん？」

何の話か分からなくて私は首を傾げてしまう。

「百色眼鏡だよ。下してきたんだろう、神罰」

と、ももんがさんは何でもないことのように言い放った。

「あ、うん」

曖昧に頷き、彼女の手当てを受けながら私は考える。おかしい。今の私は、百色眼鏡が暴れださなかった世界で、百色眼鏡に置き傘を取られてしまったせいでもず濡れになって帰るはめになり、その途中で宗田さんに拾われて、けど宗田さんの家に残らずに宗田さんの家を辞した夢野さんについてきたことになっている。この世界で私の右足は切断されていないはずだ。

患部に目を向ける。けれどそこは既にももんがさんの手によって包帯が巻かれており、どうなっているのを見ることはできない。

「どうした。きつく締めすぎたか？」

ももんがさんが問いかける。けれど私は答えない。

包帯の内側、私の右足はどうなっているのだろう。

チェーンソーで切断された痕が残っているのか、神の力で修復しようとして癒えつつある傷が残っているのか、それとも何の跡も残っていないのか。

私はそこがどうなっているかむしように気になる。

手を伸ばす。

「おい、どうした」

包帯をほどく。

「やめろ、草薙。乱心したか！」

ももんがさんの声は聞こえない。

私は無心に包帯をほどいた。

右足に巻きついた純白の布がほどかれ、てゆくたびに、私は言い知れぬ昂揚感と解放感を覚えた。まるで、蛹から蝶に生まれ変わるように、からだがそれまでと

は全く異なるけれど、本来の、そう本来のかたちに戻るような感覚だ。夢色の卵の殻が飛散し。

私は睨る。

ここはどこだろう？

風が吹いていた。

私はまたしても、幽体離脱した人間のように自分自身を見下ろしていた。

ソファの上に私は横たわり、倒れた私を囲むように包帯が渦を巻いていた。渦の中心で、ももんがさんがいつの間に取り出したのだろうか、刀を私の右足に突き刺していた。

いや、正確には突き刺そうとしていた、

だろうか。

ももんがさんの額に脂汗が浮いているのが見えた。

私の右足の、包帯が巻かれていた箇所

には人の顔があった。

人面瘡。

歪んだ傷痕は百色眼鏡の面相に似ていて、それは刀の切っ先を歯でがっしりと受け止めていた。そんな状態で人面瘡は——いや、もう断言してしまっていたらろう——百色眼鏡は唾っていた。

刀はだいたい強い力で嘯まれているように、ももんがさんは刀を押し込むことも、逆に抜き取ることもできないようだった。もう刀は捨てて、百色眼鏡の醜い頬を蹴り飛ばしたらいいのと思ったが、宙を浮遊している私はアドバイスすることができない。

拮抗は思いのほか、早くに破られた。

夢野さんが室内に飛び込んだのだ。彼はももんがさんを蹴つ飛ばすと、刀をいともあっさりとは抜き取り、今度は刺すのではなく一度おおきく振りかぶってから、斬りかかってきた。百色眼鏡はや

ら変動しようが、世界中が震撼しようが、シロナガスクジラの凶暴な回転は、私の周囲に限り更地を作り続けるだけだ。

雨が、降ってきた。

ものすごい豪雨だ。私はすぐに回転を止めざるをえなくなった。

没してしまったからだ。

私はクジラを手放し、彼女の背に登る。

日本は……、東京は……、

見渡す限りの海原となっていた。

「行こう、花子」

ぼんぼんとクジラの背を叩いて私は言った。

「もう少しましな名前はないのかしら」

花子は少しだけぼやくと、ぷしゅーと

鼻から息を吐き、プリオシン海岸を指し泳ぎはじめた。

「あらあら、まあまあ」

娘の部屋に掃除機をかけるために入っ

た草薙母は、床中に琳瑚の書いた小説が散らばっているのを見つけて溜め息を吐いた。

「あの子ったら、また窓を開けっぱなしにして……」

ここから先は真っ白だ。まだ存在して
いない。

了